

〔論文〕

馬瀬狂言資料の紹介(15)―「棒縛」について(2)―

山本 晶子

はじめに

馬瀬狂言の「棒縛」について、前稿¹⁾〔馬瀬狂言資料の紹介(14)―「棒縛」について(1)―〕に引き続き、現存の台本をもとにその伝承過程を探る。馬瀬狂言保存会に所蔵されている馬瀬A本(『六義 棒縛』)・馬瀬B本(『鬼瓦の外八番』)・馬瀬C本(『地蔵舞・茶壺・棒縛・寝音曲』)の内、前稿では馬瀬A本と馬瀬C本の内容について報告したので、本稿では馬瀬B本と馬瀬現行本を取り上げ、馬瀬B本の詞章を翻刻・紹介すると共に、和泉流諸本との関連性を踏まえ、各本の位置づけを明らかにする。

はじめに、馬瀬A本・馬瀬B本・馬瀬C本の書誌について、前稿を補足する。いずれも写本・半紙本である。

馬瀬A本：『六義 棒縛』(所蔵番号・中北小すゑ別口7)

袋綴(紙縫綴)。縦二四・〇、横一六・八cm。共紙表紙。墨付一〇丁。片面六〜九行。

馬瀬B本：『鬼瓦の外八番』(所蔵番号・中北小すゑ23)

袋綴。縦二三・二、横一五・五cm。表紙は薄茶色表紙。外題なし。裏

表紙に中北深吉の署名がある。墨付五二丁。遊紙一枚。罫線刷料紙(匣郭左右双辺。界線縦一八・三、横一三・〇cm)。前半部分に朱筆での書き入れがある。片面一〇行。なお前稿ではこの本にある署名について、「中北源吉」と読んだが、「中北深吉」に改める。

馬瀬C本：『地蔵舞・茶壺・棒縛・寝音曲』(中北小すゑ別口8)

袋綴(紙縫綴)。縦二三・七、横一六・四cm。共紙表紙。墨付三八丁。玉泉会の朱印有。片面八行。

一、馬瀬B本について

馬瀬B本の詞章には、曲中で両冠者が繩を解く展開となる和泉流諸本の詞章に一致、または近似するものが多く認められた。そこで、諸本間の関係をより詳しく調べるため、馬瀬B本の詞章と以下に掲げる和泉流諸本の詞章との関係性をまとめたのが表1-1「馬瀬B本と和泉流諸本との詞章比較・一覧」である。これは、馬瀬B本の詞章の一文を基本の単位として切り分け、それに対応する諸本の詞章を比較し、関係性の近さ・遠さを記号で示したものである(切り分けた単位の中に、定型文や他の台本との関係から、

複数の文を一つにまとめた箇所もある。その場合は、他本も同様の扱いとした。今回比較対象として選んだのは、まず明和中根本・和泉流宗家系本・茶表紙本・又三郎信英本である。これらの四本は、前稿において諸本の特徴が認められるものとして指摘した、【4段³】の太郎冠者が披露する棒の手の表現、【15段】で太郎冠者・次郎冠者の二人が外出した主人のことを評する表現、【16段】の終曲の謡で、馬瀬B本と共通するグループに属する。具体的には次の通りである。

【4段】 A bのグループ：茶表紙本・狂言大全集・又三郎信英本

【15段】 根性の叶はぬ人：明和中根本・和泉流宗家系本・茶表紙本・狂言口授箋・又三郎信英本

【16段】 終曲の謡：明和中根本・狂言口授箋・茶表紙本・又三郎信英本
この中で狂言口授箋を今回の比較対象に含めなかったのは、この本の詞章が明和中根本とほぼ重なる傾向が認められたため、同じ系統と考え、明和中根本一本を対象とした（明和中根本と狂言口授箋の関係については改めて別稿で取り上げる）。また馬瀬狂言における伝承のあり方を探るため、馬瀬A本と馬瀬現行本も比較対象とした。更に、他のグループとの差異を確認するため、上記と異なるグループの古典文庫本を加えた。こうしたグループ分けが、和泉流諸本の系統の特徴を示すものかどうかを確認する。

表1-1 馬瀬B本と和泉流諸本との詞章比較・一覧

【凡例】

・ 本表は馬瀬B本と関係する和泉流諸本の詞章を比較したものである。
・ 各本の詞章のト書きは含めない。但し、比較する上で必要と考えたト書きとト書き内の台詞、26才上部の書込内の台詞（No.177～182・網かけ部

分）は、表に含めた。

・ 表の記号は次の通りである。

●：詞章が一致、またはほぼ一致するもの。「ほぼ一致」という例は次に掲げる通り、助詞の有無等の違いを示す。

例：馬B 夫二付今日ハ去方へ行

宗 夫二付てけふも去方江行

◎：詞章の内容、表現が近似するもの（対象となる台本の中で馬瀬B本に
より近い表現を有するものに付した）。

例：馬B のさ者ともか某の留守になれば酒を盗ふてたふると承た

明 兩人の者か某か留守に成れば酒を盗てたふると承た

○：詞章の内容は共通するが、異なる語や表現の箇所が複数あるもの。

例：馬B のさ者ともか某の留守になれば酒を盗ふてたふると承た

宗 某が留守になれば兩人の者が酒をぬすんで飲ときいた

△：詞章の内容が異なるもの。

・ ここでいう「一致」とは表記の違いを問わないこととする。

・ 一文の単位は、馬瀬B本の本文を基準としたため、比較した台本によって馬瀬B本と同じ一文ではなく、その箇所が二文以上に分かれる場合がある。また異なりを明示するため、一文を分けた箇所（No.207～209）がある。

・ 同じ詞章でも、その詞章を発する役柄が異なる場合があるが、その場面の詞章が共通であれば、それを示す記号を付した。

・ 主が再登場した時の詞章の記載箇所は、諸本によって異なるが、馬瀬B本・馬瀬現行本の位置に合わせて表中に示した。

・ 近似する詞章例は、諸本の中で一致する詞章、または最も近似する詞

表 1-1 馬瀬 B 本と和泉流諸本との詞章比較・一覧

No.	馬瀬 B 本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A 本	馬瀬 現行本	近似する詞章例
1	名乗て								
2	のさ者ともか某か留守になれは酒を盗ふてたふると承た	◎	○	○	○	○	○	○	【明】 両人の者か某か留守に成れば酒を盗んでたふると承た
3	今日も去方へ参る	○	○	△	△	●	△		【古】 今日も去方へ参る
4	夫ゆえ酒をエ盗ぬ様に分別といたいた	◎	○	○		◎	○	○	【明】 酒を飲ぬやうに分別致た
5	次郎官者有か	●	●	●	●	●	◎	●	【明】 次郎官者有か
6	汝呼出す別のことてない	●	●	●	●	●	●	●	【明】 汝呼出す別の事てない
7	聞は某の留守になれは太郎官者か酒を盗て呑と聞たか定か	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【明】 聞は某か留守に成れば太郎官者か酒を盗んで呑と聞たか定か
8	扱はお耳に入ましたか	○	○	○	○	○		○	【明】 次「扱はお聞被成ましたか
9	真かう有ふと存、常々色々異見いたせとも承引致さぬに依てて御座る	◎	◎	△	△	◎	○	△	【明】 真こふ御座ろうと存て常々意見致せと承引不致
10	成ほど御留守になれはひたもの酒を盗ふて下されます	○	○	○	○	◎		○	【古】 いかにもお留守になれはひたもの御酒を盗て下されます
11	扱々憎ひ事せあ	●	◎	○	●			○	【明】 主「扱々悪イ事じや
12	夫二付今日へ去方へ行	○	●	△	△	●	△		【宗】 夫に付てけふも去方江行
13	何卒酒を呑ぬ様に分別はあるまいか	◎	○	◎	◎	○	△	○	【又】 なにとぞ酒を飲まぬ分別はあるまいか
14	されは何とかよふ御座りませふそ	●	●	●	●	●	◎	◎	【明】 次「されは何とかよふござりませうそ
15	汝思案せい	●	◎	●	●		◎	△	【明】 主「汝、思案をせい
16	ハア、よい致様が御座る	●	●	△	◎		○		【宗】 ハアよいいたし様がござる
17	きやつは此頃棒を稽古致します	●	◎	◎	●	○	◎	◎	【明】 きやつハ此頃棒を稽古致します
18	是へ召出して棒を遣してよい間を見て棒縛りに致しませふ	◎	○	○	◎	○	○	○	【茶】 是へ召れて棒をつかせて御らうせられてよき間を見て棒縛りに致しませう
19	是ハよい分別せあ	△	△	○	●	○		○	【茶】 是ハよひ分別じや
20	そふあらは是へ呼へ	○	○	○	●	◎	○	○	【茶】 そうあらハ是へ呼へ
21	畏て御座る	●	●	△	●	●	●	△	【明】 「畏て御座ル
22	太郎官者召そ	●	◎	◎	●	◎	◎	●	【明】 太郎官者召そ
23	何セア召といふか	●	○	○	●	●	●	○	【明】 太「何しや召と云か
24	中々早ふ出さしませ	●	●	○	●	●	○	○	【明】 次「中々早ふ出さしませ
25	心得た〜。御前に	●	●	◎	◎	●	○	○	【明】 太「心得た。御前に
26	汝呼出す別の事てない	◎	●	●	●	●	●	●	【宗】 汝呼出す別の事てない
27	そちは棒を稽古すると聞	◎	○	○	○	○	○	○	【明】 汝は棒を稽古すると聞た
28	一ト手遣ふて見せひ	●				●	●		【明】 一手遣ふて見せひ
29	是ハおもひも寄らぬ事を仰られます	◎	◎	◎	●	◎	◎	◎	【茶】 「是ハ思ひもよらぬ事を仰られ増
30	私ハ終に棒を遣ひました事ハ御座りませぬ	●	△	○	●	◎	△		【茶】 私ハ終に棒を遣ひました事ハ御座りませぬ
31	イヤ〜うそをいわぬ人に聞た	◎	●	●	●	●	◎	○	【宗】 いや〜うそをいわぬ人にきいた
32	せひとも遣へ	◎	○	○	○	○		△	【明】 せひとも遣ふて見せひ
33	扱ハ次郎官者申上たな	●	●	●	●	◎	◎	◎	【明】 太「扱は次郎官者、申上たな
34	某ハ申上ねともあなたによふ御存せあ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【明】 次「某は申上ねとも、能御存しや
35	早ふ遣ふて御目に懸さしませ	●	○	○	●	○	○	○	【明】 早ふ遣ふて御目に懸さしませ
36	左様ならば心得ました	○	◎	○	○	◎		△	【古】 シテ「左様ならば畏てゐる
37	先夫に御待なり（ママ）まで（ママ）		●	◎	◎	●			【宗】 先ツそれにお待ちなされませ
38	早ふ遣て見せ	●					△	△	【明】 早ふ遣ふて見せひ
39	畏て御座る								
40	次郎官者ぬかるナ	●	●	●	◎	◎	●	◎	【明】 「次郎官者ぬかるな
41	心得ました	●	●	●	●	◎	◎	○	【明】 次「心得ました
42	惣して棒は四十八手とハ申せとも、くたけは八十八手にも遣ひます	◎	●	●	●	●	●	◎	【宗】 そふじて棒ハ四十八手とハ申せ共、くだけハ八十八手にもつかあます
43	先向ふから打て参るをトさへましてすそな難イ、胸をほうどつく手が御座る	○	○	○	◎	△	◎	△	【茶】 先向ふから打て参るをトさへまして、すそをなくつてむねをほうどつく手が御座る
44	早い手せあナア	△	○	◎	○	○	○	○	【又】 主 これは早い手ぢゃの

No.	馬瀬 B 本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A 本	馬瀬 現行本	近似する詞章例
45	又打て参たをトと受まして、引ばづいてめうたん二つな打割手も御座る	◎	○	◎	◎	△	◎	△	【明】「又打て参をト致てひつはつてみやうたん二つに打わる手も御座る
46	是も早い手セあ	△	○	◎	○	○	○	○	【又】主 これも早い手ぢゃなあ
47	又表裏に掛て参る時ハ是をかういたしてヤヤ	◎	◎	○	◎	◎	○	○	【明】「又表裏に懸て参る時は、こふ致て
48	取たそ	●	●	●	●	●	●	●	【明】主「捕たそ
49	是ハ何とさせらるゝ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【明】太「是ハ何となさるゝ
50	何ととはちつとしておれ	△			△	△	△	△	
51	取たそ		◎			◎			【宗】「とつたぞ
52	是は何とする					◎			【古】シテ「何とする
53	何とはおのれちつとしておれ								
54	にくいやつ		◎	◎		◎			【宗】何とハにくいやつ
55	ホウよいなりセあ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【古】次「ヲ、よいなりの
56	とても縛らるゝならばコウ後口手に尋常には縛られていて	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	【又】とても縛らるゝならば、こう尋常に、うしろ手には縛られていて
57	取たそ	●	●	●	●	●	●	●	【明】主「とつたそ
58	是は何と被成ます	◎	◎	●	◎	●		●	【又】次郎冠者 これはなんと成させます
59	持てまみつたの	●		●	●	●			【明】主「持て参つたの
60	何とはおのれちつとしておろ								
61	先は何とした事て御座る		◎	●	●	○			【茶】先は何とした事て御座る
62	イヤ某か留主になれは酒を盗ミ呑と聞たによつて其通りセあ	○	○	○	○	○	◎		【馬 A】るすになれは酒を盗んで呑によつて其通じや
63	夫は二郎冠者て御座る	●	●	○	◎	○	○		【明】太「夫は二郎冠者て御座る
64	太郎官者て御座る	●	●	○	◎	○	○		【明】太郎くわじやでござる
65	御主セあ	○	○	●	●	○	◎		【又】次郎冠者 おぬしぢゃ
66	セ(ママ) ちセあ	○	○	●	◎	○	●		【又】太郎冠者 そちぢゃ
67	汝セあ		○	●	●	○			【又】次郎冠者 なんぢぢゃ
68	わこりよセあ		○	●	●				【又】太郎冠者 わごりよぢゃ
69	ヤイ〜 ハア	●	●	●	○				【明】主「ヤイ〜 兩人「ハア
70	兎角兩人して呑(ママ) 聞た	◎	◎	◎		◎	◎	◎	【又】主 とかく兩人ともに飲むと聞いた
71	今日も用事有て去方へまる	○	○	△	△	○	△	△	【明】今日も去方へ行
72	能留主をせい	●	●	●	●	●	●	●	【明】能ふ留主をせい
73	とれへぞ御出被成るゝならば、此繩を解て御出被成ませ	○	●	●	△	●		●	【宗】どれへぞ御出被成るゝならば、此繩を解て御出被成ませ
74	解て御出被成ませ	◎	●	●	◎	△		●	【又】次郎冠者 解いてお出でなされませ
75	頓て戻ふそ	●	△	△	●	△	△	●	【明】主「頓て戻ふそ
76	ア、申、繩を解て御出被成ませ			●		△	○	●	【又】太郎冠者 や、申し。繩を解いてお出でなされませ
77	申申申申	●	●	●	●	●			【明】兩人「申〜
78	ホ早とつと行せられた	◎	◎	◎	●	◎	◎	◎	【茶】はやとつと行れた
79	誠にとつと行れた	△	△	●	△	△	△	●	【又】次郎冠者 まことに、とつと行かせられた
80	先下に居よ。心得た	●	●	●	◎			●	【明】太「先下に居よ 二郎「心得た
81	扱是は誰申上た事セあいなア	◎	●	●		△	○	◎	【宗】扱是は誰が申上た事じやいなア
82	されは誰か申上た事セあしらぬまで	◎	◎	◎	◎		△	◎	【又】次郎冠者 されば誰が申し上げたことぢゃしらぬ
83	ハウこふしていは一入酒か呑たい事セあいなア	◎	○	◎	◎	△	○	○	【明】太郎「此様にして居れハ一入酒か呑たい事じや
84	其通りセあ	●	△	●	●	△		○	【明】二郎「其通りじや
85	呑事はならずとも酒の匂ひを聞てなりとも慰ふてはあるまいか	◎	○	○	○	△			【明】太郎「某の思ふは呑事ハならずとも、酒の匂ひなりとも聞てなくさも慰ふては有まいか
86	夫は一段とよかろふか、蔵の戸かあくまいそよ	◎	△	◎	◎	○	○	△	【明】二郎「一段とよかろふか蔵の戸か明まい
87	それは某か分別しておみた	○		◎	○	○	◎	○	【又】太郎冠者 それはみどもが分別をした
88	こふて(ママ) して開ふといふ事セあ	◎		◎	●	○	●		【茶】かふして明けふと云ふ事じや
89	是はよい分別セあ	△	△	◎	○	△	○	△	【又】次郎冠者 これはいちだんの分別ぢゃ

No.	馬瀬 B 本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A 本	馬瀬 現行本	近似する詞章例
90	扱おひた (ママ) しい壺数せあナア	○		◎	○	△		○	【又】太郎冠者 さてさて、おびたしい壺数ぢゃ
91	扱とれにせふそ	○	○	◎	○	○	△	○	【又】太郎冠者 さてこれは、どれにせう
92	それこそそちの物好にせい	△	◎	◎	◎	◎		○	【古】次「夫はそちか物好にせい
93	そふあらはアノ洪紙で覆のしてあるにせふとおもふか何と有ふ	○	○	○	○	○		○	【宗】そふあらば、此しぶかみで覆のしたのにせふ
94	是は一段とよかるふ	○	◎	○	○	◎			【宗】一段とよかるふ
95	そふあらは先覆を取ふ								
96	メリ〜 ムウよい匂ひせあ	◎	●	●	◎	◎		◎	【又】太郎冠者 メリメリメリ、メリメリメリ。むむ、よい匂ひぢゃ
97	爰迄も匂ふは	◎	◎	◎	●	◎		●	【茶】是迄もにほふハ
98	扱匂ひを聞ぬうちは其様にもなかつたか、匂ひを聞てからは虫か込上て堪忍ならぬ	○	◎	◎	◎	◎			【古】シテ「匂ひをか、ぬ内は其様にもなかつたか、匂ひをかいだれハ虫かこみあけて堪忍ならぬ
99	其通りせあ	△	○	△	△	◎			【古】次「身共も其通りぢゃ
100	何とぞ呑たい物せあか		●			●			【宗】何卒飲たいものぢゃが
101	イヤ分別とした	△	△	●	○	△			【又】太郎冠者 いや、分別をした
102	二郎 きやつか分別た心元ない	●	△	●	●	△			【明】「きやつか分別は心元ない
103	是〜こ (傍書 コリヤ〜こ) ふしくてくもふといふ事せあ	●	●	●	◎	●			【明】太郎「是〜こふして汲ふと云事ぢゃ
104	是はよい分別せあ	●	◎	◎	●				【明】二郎「是はよい分別しや
105	是は先身ともか呑ふ	◎	●	◎	◎	◎	△	△	【宗】まづはハ身共がのもふ
106	二郎 兎も角もせい	△	△	●	●	△	●	●	【又】次郎冠者 ともかくもせい
107	二郎 何とする〜	●	◎	◎	●	◎	●	●	【明】二郎「何とする〜
108	太郎 呑れぬはいヤイ	●	●	◎	●	◎	●	●	【明】太郎「飲れぬわいはい
109	それは先身ともに呑せ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【宗】そふあらば先夫ハ身共にのませい
110	ムウ御主には呑せうか、某か呑よふかない	◎	○	○	○	○	○	○	【明】太郎「そちには呑せふか、身共か呑よふかない
111	それは某か分別とある	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【明】二郎「夫は身共か分別か有ル
112	先呑せ	●	○	○	○	○	●	◎	【明】先飲せ
113	そふあらは呑せふか	○	○	○	○	○	△	◎	【馬現】太「そうあらば飲ませてやらう
114	呑か〜		○	●	◎	○	○	●	【又】太郎冠者 飲むか飲むか
115	呑そ〜			●	●			●	【又】次郎冠者 飲むぞ飲むぞ
116	ムウよい酒せあ	◎	△	◎	◎	△	●	○	【馬A】ム、ウ、よひ酒じや
117	何とよい酒かー		△	●	◎	△			【又】太郎冠者 なにとよい酒か
118	最一ツ汲てこふ	△		○	○		○	○	【馬現】又汲んでこう
119	早ふ汲てこい	●	○	△	△	△	△	△	【明】早ふ汲て来い
120	さア呑せて呉	●	△	△	△	△	△	△	【明】「さあ〜のませてくれ
121	分別と云ハ別の事でもない			●	●	●	●	●	【又】次郎冠者 分別といっば別のことでもない
122	是此手に持せて呑といふ事せあ	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【明】二郎「是〜此手に持せて呑めと云事ぢゃ
123	是は一段と出来た	○	○	○	○	○	○	○	【宗】是は一段の分別ぢゃ
124	そふあらは呑そよ	△	△	△		△			
125	早ふ呑	△	△	△		△			
126	呑か〜	●	◎	◎	◎	◎	●	●	【明】呑か〜
127	呑そ〜	△		◎	●	△		●	【茶】「呑そ〜
128	ムウよい酒せあ	○		○	○		○	○	【明】太郎「殊外よい酒しやナア
129	何と能酒せあナア	△		△	○			△	【茶】殊の外よい酒じや
130	イヤ最一ツ汲ふ			○	○			○	【又】また行て汲んでこう
131	面白かつた	◎	○	●			△		【又】太郎冠者 おもしろうかつた
132	ちとうたおふ	●	●	●	●	◎		◎	【明】ちと諷ふ
133	扱こふ受持た			◎			◎	◎	【又】さて一つ受け持った
134	汝一さし舞へ	○	◎	◎	○	◎	●	○	【馬A】あ (ママ) んじ一さしまゑ
135	此躰てはゆるしてくれ	○	○	△	△	○	○	◎	【馬現】太「此の体で舞は許してくれい
136	イヤ其なりか面白イ		◎			△	◎	◎	【宗】いや〜其躰が面白

No.	馬瀬 B 本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A 本	馬瀬 現行本	近似する詞章例
137	ひらに舞へ	○	◎			○	●	◎	【馬 A】 ひらにまゑ
138	そふあらは舞ても見よふか	○	●	◎	◎	◎	●	◎	【宗】 そふあらは舞てもみやうか
139	一段とよかる		●	●	●	△	●	△	【宗】 一段とよかるふ
140	舞 七つ子	◎	○	◎	◎	○	○	○	【又】 次郎冠者 そもさてもわごりよは、踊り人が見たいか。踊り人が見たくば、北嵯峨へおちやれの。北嵯峨の踊りは、葛帽子をしゃんと着て踊る振りがおもしろい。吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、恋しき人は見たいものぢや。所々お参りやって疾う下向召され、咎をばいぢやが負ひませう
141	よいや〜	●	◎	●	●	●	●	●	【明】 二郎「よいや〜
142	不調法をした		△	●	●	△	△	◎	【又】 次郎冠者 不調法をした
143	中々面白事て有た	○	●	◎	◎	△			【宗】 中〜おもしろい事であつた
144	扱身とももかふ受持た	△		○	○	○	○	○	【茶】 扱某も一つうけ持た
145	汝も一さし舞へ	○	●	●	●	○	●	○	【宗】 汝も一さしまへ
146	此体てはゆるしてくれ	△	○	△	◎	△	△	◎	【茶】 某ハ此ていてハゆるしてくれ
147	其なりか面白	◎	△	●	●	△	◎	◎	【又】 次郎冠者 そのなりがおもしろい
148	ひらに舞へ	◎		◎	●	◎	◎	◎	【茶】 ひらにまへ
149	そふあらは舞てもみよふか	◎	◎	●	●	○	○	○	【又】 さうあらば、舞うてもみうか
150	舞 暁の明星	●	○	●	○	●		○	【明】 明星ヲ舞ウ
151	よいや〜	●		●		●	●		【明】 二郎「よいや〜
152	不調法をした	△		●		△	●	◎	【又】 太郎冠者 不調法をした
153	中々面白事て有た		◎	△		△	△	△	【宗】 中〜おもしろふ有た
154	太郎 扱某かおもふは此繩を解、吞たらは一段と面白かるふなア	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	【明】 太郎「何と此手をといて吞ふたら、又一入面白かるふなア
155	二郎 それは汝かいふ迄もない事セあ	○	○	●	●	○	△	◎	【又】 次郎冠者 それはなんぢが言ふまでもないことぢや
156	なんと汝か繩は解ぬか	○	○	○	○	◎	●	●	【馬現】 太「何と汝がなわはとけぬか
157	堅ふく、つておかれたか		△	△	△	△	△	△	
158	去ながら最前からちよ（ママ）ゆるふたよふな	◎	○	○	○	○	○	○	【明】 次郎「最前よりちとゆるふ成た
159	早ふとけ〜	△	△	●	○	△	◎		【又】 早う解け早う解け
160	ア、解れはよいか	○	○	●		○			【又】 次郎冠者 解くればよいが
161	早ふ解け〜	○		●	●	○		●	【又】 太郎冠者 早う解け早う解け
162	二ハア			○	○				【又】 次郎冠者 ほう
163	太 何とした			△	△				
164	解たハイヤイ	○	○	○	△	○	○	○	【明】 二郎「イヤとけたは
165	何しや解た	△	○			△			【宗】 とけたか
166	中々		●						【宗】 なか〜
167	さア身とももの解てくれ	○	●	◎	○	○	◎	○	【宗】 サア〜身共のもといてくれい
168	お、とれ〜汝も解て遣ふ	△	△	△	△			○	【馬現】 次「そうあらば解いてやらう
169	早ふ解てくれ							○	【馬現】 そう云はず解いてくれい
170	扱さそく、られハ窮屈に有たてあらふ		◎	○	○	○	○	○	【宗】 ア、さぞきうくつにあつたであらふ
171	イヤモ手かむり〜いふ事セあ	△	△	◎	◎	△	◎	◎	【又】 太郎冠者 手がむりむりすることぢや
172	サゾソウ有フ				◎	△	△	△	【茶】 さふてあらふ
173	二郎 扱身とも珍し酌をセふ	○		○	◎	○	△		【茶】 身ともか珍しう酌をせう
174	一段とよかるふ	●		◎		●			【明】 太郎「一段とよかるふ
175	先是は汝へさそふ	◎	△					△	【明】 太郎「又汝へさそふ
176	太郎 是へくれ	●	◎	○	●	○		△	【明】 太郎「是へくれい
177	最前最卒度短つた	◎							【明】 「扱最前の舞はみしかかつた
178	又何成とも舞	○	○						【宗】 最一さしまへ
179	陸ニアガレバ〜	○	○						【明】 シテ舞
180	不調法を		△						
181	中々面白□あつた	○	◎						【宗】 中〜面白事て有た
182	扱是は□そふ	○	◎						【宗】 是をそちへさそふ

No.	馬瀬B本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A本	馬瀬 現行本	近似する詞章例
183	主 兩人の者に留主を申付た	◎			◎	◎			【明】主「兩人の者ニ留主を申付て置た
184	先急て帰ふ	●	◎		●	◎			【明】先急て帰ろふ
185	是はいかな事	●	●	●	●	●		●	【明】是はいかな事
186	諷の声かする	●		●	●	●			【明】諷の声かする
187	サレハコソ兩人なから繩を解て酒を呑いる	◎	○	○	◎	○		○	【明】去れハ社兩人なから繩を解て酒を呑ふておる
188	扱ゝ憎ひ事かな		◎	◎	●	●			【茶】扱ゝにくい事かな
189	先様子を見ふ		△			◎			【古】先容子を見う
190	太 二郎官者ちつとこい	●	◎	●	●	◎	◎	●	【明】太郎「次郎官者一寸と来い
191	物を見せよ	●	●	●	●	●	●	○	【明】物を見せう
192	何せあ	●	○	△	●	●	○	◎	【明】二郎「何しや
193	ちよつと来い								
194	物を見せふ								
195	何せあそいヤイ								
196	コウ盃の中に頼た人の姿たか見ゆる	○	○	○	○	○	○	◎	【馬現】此の酒杯の中に頼うだお方のかけが見ゆる
197	誠に姿か見ゆる	○	○	○	○	◎	◎	◎	【馬A】誠ニかけな見ゆる
198	ホウ、とれへやらいた	◎	◎	●	◎	◎		●	【又】太郎冠者 ほ、どれへやら行た
199	誠にとれへやらいた		◎	●	●	◎		●	【又】次郎冠者 まことにどれへやら行た
200	某かおもふ頼た人は日頃根性の叶はぬ人せあによつて、縛ておかれたれとも呑か〜とおもふ執心か此盃のうちへ通ふと見へた	◎	◎	◎	◎	○	○	○	【明】太郎「某の思ふは頼た人は常々こん性の叶ハぬ人しやに依て、縛てハ置たれとも酒を呑か〜と思ふ執心か此内へ通ふと見へた
201	成程通ふと見へた	△	△		△	△	△	△	
202	いさ此体を諷にうたおふてはあるまいか	○	○	○	●	○	○	◎	【茶】いさ此ていを諷に諷ふてハ有まいか
203	一段とよかろ	●	●	●	●	●	●	●	【明】一段とよかろふ
204	さア〜うたへ〜	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	【馬現】さあ〜歌へ〜
205	太郎 月はひとつ	●	○	●	●	○	●	●	【明】太郎「月ハ一つ
206	二郎 かけはふたつ	●	○	●	●	○	●	●	【明】二郎「影ハ二つ
207	二人 三つ塩のよるの盃に主を乗て	●	●	●	●	●	●	●	【明】兩人「三ツしほの夜ルの盃に主をのせて
208	うしともおもわぬ	●	●	●	●	●	○	●	【明】うしとも思ハぬ
209	しほちかなや	●	●	●	●	◎	◎	△	【明】汐路かなや
210	扱ゝ憎い奴せあ		◎			△			【宗】扱〜にくい事じや
211	某を諷に作りおつた		○						【宗】某をうたいおる
212	ヤイ〜	◎	●	◎	◎	●		◎	【古】主「やい〜
213	ソリヤ御帰り被成た	●	●	●	●	△	○		【明】太「そりや御帰り被成たは
214	誠に帰りなされた		○			○			【宗】何じやおかへり被成た
215	ハアこりや御帰り被成ましたか	◎	△	◎	◎	◎		○	【明】二郎「御帰り被成ましたか
216	何の御帰り被成ました			●				△	【又】主 なんのお帰りなされましたか
217	またそこにおるか。ヤイ〜	○	○	◎	○			○	【又】主 まだそこにあるか。やいやいやいやい、やいそこなやつ
218	ハア御帰り被成ましたか	●	◎	△	●	●		○	【明】太郎「ハア御帰り被成ましたか
219	何ンの御帰り被成ました			△	△	○		△	【古】主「お帰りなされましたか
220	扱ゝ腹の立	△	△	△	△	●			【古】主「扱、腹の立
221	ハア御ゆるされませ	●	●	●	◎	◎			【明】太郎「御ゆるされませ
222	またそこにおるか			●	●			●	【又】主 まだそこにあるか
223	ハアゆるさせられ				●			◎	【茶】ゆるさせられ〜
224	アノ横着者	◎	○	◎	○	◎		○	【明】「あのお、ちやくもの
225	ハアゆるされ (ママ) られ		●	△	◎	●		◎	【宗】ゆるさせられい〜
226	ヤルまいそ〜	●	●	●	●	●		●	【明】やるまいそ〜

章を掲げた。

この表1で示された記号の数を集計したものが、表1-2「馬瀬B本と和泉流諸本詞章比較・集計」である。

まず全体の傾向を把握するため、各本の一文に分けた全体の件数を確認すると、

馬瀬B本・二二六 馬瀬A本・一六〇 馬瀬現行本・二一〇

明和中根本・二一七 和泉流宗家系本・二三一 茶表紙本・二三五

又三郎信英本・二七一 古典文庫本・二九七

となる。今回の調査では、馬瀬B本の一文を一件としたため、馬瀬B本以外の台本では、接続詞を用いて二文を一文にしてのものや、その逆の例があることから、一件の単位は台本によって多少異なるが、台本の傾向を把握する上では有効と考える。

この全体の件数からは、馬瀬狂言資料の馬瀬A本と馬瀬現行本が、和泉流諸本に比して件数が少ないことがわかる。これまで馬瀬狂言台本に詞章の省略化の傾向があることを指摘してきたが、この全体の件数の少なさは、この内容と合致するものと思われる。また、この中でその数が最も少なかったのが馬瀬A本で、終曲部の詞章が省略されているだけでなく、前編で指摘した通り、各場面でも省略化の傾向が認められたこととも関わる結果であろう。

さて、馬瀬B本について、表1-2で確認すると、共通、または近似する詞章の割合（●◎○の合計）が最も多いのは又三郎信英本で、七三・九%、それに次ぐのが、茶表紙本が七二・六%で、明和中根本・和泉流宗家系本は、共に六九・〇%であった。先述した同じグループ内の台本はいずれも七割前後の数値となった。これらの中でも、又三郎信英本が最も高い数値

表1-2 馬瀬B本と和泉流諸本詞章比較・集計

馬瀬B本 (全226件)		●	◎	○	△	●◎○ 合計
明和中根本	件数	63	51	42	32	156
	割合 (%)	27.9	22.6	18.6	14.2	69.0
和泉流宗家系本	件数	49	51	56	39	156
	割合 (%)	21.7	22.6	24.8	17.3	69.0
又三郎信英本	件数	70	55	42	25	167
	割合 (%)	30.9	24.3	18.6	11.1	73.9
茶表紙本	件数	73	52	39	19	164
	割合 (%)	32.3	23.0	17.3	8.4	72.6
古典文庫本	件数	41	52	53	35	146
	割合 (%)	18.1	23.0	23.5	15.5	64.6
馬瀬A本	件数	32	36	39	26	107
	割合 (%)	14.2	15.9	17.3	11.5	47.3
馬瀬現行本	件数	38	42	51	26	131
	割合 (%)	16.8	18.6	22.6	11.5	58.0

(割合の数値は、小数点第2位を四捨五入した。)

だったことが注目される。一方、同じ縄を解く演出ながら異なるグループ（宗家系と言える）の古典文庫本の数値は、六四・六%と六割は超え共通性は認められるが、先のグループの台本に比べると、その数値は低い。前稿で指摘した特徴的な表現によるグループ分けは、個々の表現に止まらず、詞章全体の関係性においても有効であることが認められた。またこの分類した記号ごとに確認すると、詞章が一致、ほぼ一致の●印の割合が、又三郎信英本、茶表紙本が三〇・九、三二・三%で、後述する馬瀬現行本に比しても高い数値である。

これらのことから、馬瀬B本は、縄を解く演出を持つ和泉流諸本の中でも又三郎信英本、茶表紙本、明和中根本、和泉流宗家系本と同じ系統で、その中でも又三郎信英本、茶表紙本の詞章と最も近いものと言える。これまでの調査で、明和中根本、茶表紙本、和泉流宗家系本との共通性について指摘してきたが、今回は又三郎信英本との近さが認められる結果となった。馬瀬B本と又三郎信英本・茶表紙本の共通した詞章について、例示する。主人が太郎冠者、次郎冠者を縄で縛り、両人の訴えを聞かず、外出する場面（表1-1 No.65-68）は、次の通りである。他本との違いがわかるよう、明和中根本を参考に掲げた。（傍線は稿者による。以下同じ。）

馬B イヤ某か留主になれは酒を盗ミ吞と聞たによつて其通りセあ。夫は二
郎冠者て御座る。太郎官者て御座る。御主セあ。セちセあ。汝セあ。
わこりよセあ。

又 主(前略) この中それがしが留守になれば、酒を盗うで飲むによつての
ことぢや。次郎冠者それは太郎冠者でござる。太郎冠者それは次郎冠者で
ござる。次郎冠者おぬしぢや。太郎冠者そちぢや。次郎冠者なんぢぢや。

太郎冠者 わこりよぢや。

茶 留主になれハ酒を盗んで吞と聞たによつての事じや 夫ハ次郎官者て
御座り増 太郎官者て御さり増 おぬしじや 其方じや 汝じや わこり
よじや

明 某か留守に成れば酒を盗んでたふると聞た 夫故其ことくした 太「夫は
二郎官者て御座ル 二郎「イヤ太郎官者て御座ル 太「イヤそちしや 二郎
「汝しや

太郎冠者と次郎冠者が酒を盗み飲んだことを互いに相手になすりつける場
面で、明和中根本では「そちしや」「汝しや」で終わるところを、馬瀬B本、
又三郎信英本、茶表紙本ではもう一度繰り返すことで、酒を盗み飲んだの
は相手だと主張する両冠者の姿勢がより強調される。このように同じ内容
を繰り返す表現は他の箇所にも指摘できる。太郎冠者が酒を盃に汲み飲も
うとするが飲めず、次郎冠者に飲ませる場面（表1-1 No.117）で、

馬B ムウよい酒セあ。何とよい酒か。最一ツ汲てこふ。
又 次郎冠者さてもさてもよい酒ぢや。太郎冠者なにとよい酒か。
次郎冠者なかなか。太郎冠者また行て汲んでこふ。

明 二郎「扱きよい酒じや 汝にも吞せふ 早ふ汲て来い

馬瀬B本は又三郎信英本の通り、太郎冠者が次郎冠者の言葉を繰り返し、
そこから酒を汲みに行くという流れになる。このように同じ内容を再度繰
り返すことで、その内容を印象づけることになる。同様の例は、他に縄を
解く時の「早ふとけく」（表1-1 No.159-161）にもある。こうした同じ内

容の反復は狂言によくあるものだが、馬瀬B本以下三本は他本に比べその傾向がより強く認められる。このように、馬瀬B本の「棒縛」には、又三郎信英本と共通する詞章が認められた。このことは、野村又三郎派の詞章が馬瀬に伝承されていたことを明示するものと言えよう。

またここに掲げた馬瀬B本の詞章には、特徴的な表記が認められる。指定辞「ぜあ」である。この表記は、又三郎信英本にも、また馬瀬A本、馬瀬現行本にも認められない。この語についてはすでに小林賢次氏・小林千草氏の先行研究があるが、小林千草氏の「成城〈甲〉本における「ぜあ」では、成城〈甲〉本の「ぜあ」の分析から

「ぜあ」専用の先行台本を所有していたのは、元業の先代和泉元貞であった可能性が高い。したがって、狂言セリフの指定辞に「ぜあ」を用いる台本は、和泉家で天明年間（一七八一〜八九）頃に存在していたと考えられる。

との指摘がなされている。馬瀬狂言資料において、この「ぜあ」という表記のある台本が他にあるか、まだ調査が十分ではないが、少なくともこの馬瀬B本の詞章が成立した時期を考える上で参考となるものだろう。なおこの「棒縛」においては、三三箇所「ぜあ」が確認できるが、小林千草氏の分類を参考にこれらを分類すると、文末用法では、①「名詞+ぜあ」が一七箇所、②「ことぜあ」が七箇所、③「名詞+ぜあ+終助詞」が四箇所、④「何ぜあ／何ぜあそいやい」が三箇所となる。また文中用法では、⑤「名詞+ぜあ+によって」と⑥「名詞+ぜあ+が」がそれぞれ一箇所となった。以下、①から⑥の具体例を示す。

① 是ハよい分別七あ（No.19）

② 扱々憎ひ事七あ（No.11）

③ 何セア召といふか（No.23）

④ 扱是は誰申上た事七あいなア（No.81）

⑤ 某かおもふハ頼た人は日頃根性の叶はぬ人七あによつて、（No.200）

⑥ 何とそ呑たい物七あか（No.100）

馬瀬B本では①「名詞+ぜあ」の用例が最も多く、小林氏が報告された成城〈甲〉本のように①と②が同数で最も多いという状況とは異なる。この違いについて、調査対象の曲が異なることもあり、一概に判断できない。引き続きこの「ぜあ」については調査を継続する。

二、馬瀬現行本について

次に馬瀬現行本についても、馬瀬B本と同様の作業を行い、表2-1-1「馬瀬現行本と和泉流諸本との詞章比較・一覧」にまとめた。これをもとに、馬瀬B本の傾向とも比較し、馬瀬狂言における伝承の実態を明らかにする。凡例は、表1-1-1に準ずる。

そして、表2-1-1の結果を受けて、各記号の数を集計したものが、表2-1-2「馬瀬現行本と和泉流諸本の詞章比較・集計」である。

この中で、和泉流諸本と一致、または近似する詞章の割合（●○○の合計）が最も多いのは又三郎信英本で、全体の七一・〇％である。これは馬瀬B本と同様の結果となった。ただ記号毎の傾向では、先述の通り、詞章が一致、ほぼ一致する●印の割合は二〇・九％と二割前半に止まる。この又三郎信英本に次ぐ高い数値が、茶表紙本の六三・八％、馬瀬B本の六二・八％である。馬瀬B本で数値が高かった明和中根本は五六・七％と、馬瀬B本の時より約一三ポイント近く下がる。他の諸本をみると、和泉流

表 2-1 馬瀬現行本と和泉流諸本との詞章比較・一覧

No.	馬瀬現行本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A 本	馬瀬 B 本	近似する詞章例
1	主「是は此のあたりの者でござる	●	●	●	●	●	●		【明】「是ハ此当の者で御座ル
2	召使ふ兩人の者がそれがしの留守に さえなれば酒を盗んで飲むと聞いた	○	◎	◎	◎	△	◎	○	【宗】某が留主になれば兩人の者が酒をぬす んで飲ときいた
3	きつとふんべつ致してござる	○	○	◎		○	○		【又】きつと分別をいたいた
4	先づ次郎下者を出し申付けう			●	●		○		【又】まづ次郎冠者を呼び出だし、申し付けう
5	次郎下者あるか	●	●	●	●	●	◎	●	【明】次郎官者有か
6	次「はあー 主「居たか 次「御前に		●	●	●				【宗】ハア イタカ お前に
7	主「汝呼出す別の事でない	●	●	●	●	●	●	●	【明】汝呼出す別の事でない
8	太郎下者はそれがしの留守にさえな れば酒を盗んで飲むと聞いたがじよ うか	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【明】聞は某が留主に成れば太郎官者か酒を盗 んで呑と聞たか誂か
9	次「之は思もよらぬ事を承りまする								
10	主「いやいや匿すな、嘘をつかぬ 人に聞いた								
11	つつまずと言へ								
12	次「そうあらばお聞きなされましたな	◎	◎	◎	◎	◎		○	【明】次「扱は御間被成ましたか
13	主「おーさて聞いた	○	○	●	○	○			【又】主 おおさて聞いた
14	次「何を匿ませう	△	△	●	◎	△		△	【又】次郎冠者 なにを隠しませう
15	太郎下者はあなたの留守にさえな れば来た者と酒を盗うで下さるる	○	○	◎	◎	○		○	【又】こなたがお留守にさへなれば、太郎冠者 がひたものに酒を盗うでたべまする
16	主「につくい奴じやなあ	○	○	◎	○			○	【又】主 さてさて憎いやつぢゃ
17	次「左様で御座る								
18	主「何ぞ良いふんべつはないか	○	○	◎	◎	○	△	○	【又】なにとぞ酒を飲まぬ分別はあるまいか
19	次「何とが良うござりませうぞ	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	【馬 A】「なにとよふ御座りましようぞ
20	主「何とが良からうぞ	△	△	△	△		△	△	
21	次「いや彼等は此頃棒を稽古致しま する	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	【明】きやつハ此頃棒を稽古致しまする
22	之へ召されてごらんなされて良い間 を見て捧縛りになされたが何とで御 座る	○	○	◎	○	○	○	○	【又】これへ呼びなされ、一手使はせてご覧 なされて、そのよい間を見て、捧縛りとは、 なんとでござりませう
23	主「それは一段の分別じや	○	○	●	○	○		○	【又】主 これはいちだんの分別ぢゃ
24	そうあらばその繩の用意をせい								
25	次「心得ました								
26	次「用意致してござる								
27	主「そうあらば太郎下者を召せ	○	○	◎	○	○	◎	○	【又】さうあらば、太郎冠者を呼べ
28	次「心得ました	○	○	●	○	○	○	○	【又】次郎冠者 心得ました
29	太郎下者召すぞ	●	◎	◎	●	◎	◎	●	【明】太郎冠者、召そ
30	太「なんじや召すうー	○	●	◎	○	○	○	○	【宗】汝 (ママ) じやめす
31	次「中々	○	○	●	○	○	●	○	【又】次郎冠者 なかなか
32	太「御前に	●	●	◎	◎	◎	●	◎	【馬 A】「ハア御前に
33	主「汝呼出す別の事でない	◎	●	●	●	●	●	●	【又】主 なんぢ呼び出す別のこともない
34	そちは此頃棒を稽古すると聞いたが じようか	○	◎	◎	◎	○	○	○	【又】そちはこの中棒を稽古すると聞いたが定 か
35	太「之は思ひも依らぬことを承りまする	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	【馬 A】「是ハ思ひもよらぬ事を承ます
36	主「いやいや匿すな。嘘をつかぬ 人に聞いた	○	○	○	○	○	○	○	【明】主「イヤ〜嘘をつかぬ人に聞いた
37	つつまずと云へ	△	○	△	△	△		△	
38	太「そうあらばお聞きなされましたな								
39	主「中々								
40	太「次郎下者申し上げたな	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	【馬 A】「治郎くわじや申上たな
41	次「それがしは申し上げねども頼 うだお方良う御存じじや	◎	◎	●	●	●	◎	◎	【又】次郎冠者 それがしは申し上げねども、頼 うだお方はようご存じぢゃ
42	ひらに一手使うてお目にかかけい	○	◎	◎	○	◎	◎	○	【又】一手使うて、お目にかかけませい
43	太「そうあらば捧をとつて参りませう	△	△	△	△	△	△	△	
44	主「ともかくもせい		△	△	△		△		
45	必ずぬかるな	◎	◎	◎	◎	●	◎	◎	【古】主「必ぬかるな

No.	馬瀬現行本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A本	馬瀬 B本	近似する詞章例
46	次「ぬかる事ではござらぬ	○	○	○	○	○	○	○	【明】次「心得ました
47	太「総じて捧の使ひ用は四十八手とは申せども、くだけば八十八手にも使へます	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【宗】そふじて捧ハ四十八手とハ申せ共、くだけハ八十八手にもつかぬます
48	先づ向ふから打つて参るとひつぱづいてみようたん二つに打割る手もござる	△	△	△	△	○	△	△	【古】先向ふから打て参るをと致まして、裾を払ふてめうたむ二つに打わる手かふる
49	主「さても〜早いことじやなあ	△	●	○	○	◎	●	○	【宗】扱ゝ早い事じやなア
50	次「早い事ではござります	○	○	◎	○	○	○	○	【又】次郎冠者 早い手ではござります
51	太「又向ふから打つて参るとやつとさえましてすそをなぐり胸板をほ一と突く手もござる	△	△	△	△	○	△	△	【古】シテ「又向ふから打て参るをと構へまして引外して胸をほうとつく手もふる
52	主「さても〜早い事じやなあ	△	△	○	△	△	●	○	【馬A】「扱ゝ早ひ事じや
53	次「其の通りではござる	○	○	○	○	○	○	○	【又】次郎冠者 早い手ではござる
54	太「又表裏にかかつて参るとやつとさえまして やつとなやつとな〜	○	○	○	○	○	◎	○	【馬A】「又ひやりニか、つて参そをやつとなし
55	主「とつたぞ	●	●	●	●	●	●	●	【明】主「捕たそ
56	きつと縛れ〜								
57	次「心得ました								
58	太「是は何となされまます	◎	●	●	◎	●	◎	◎	【又】太郎冠者 これはなにとなされまます
59	主「何と云ふ事があるものか	△			△	△	△	△	
60	何時も酒を盗うで飲むに依つて此の通じや								
61	次「良いなりの〜	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【古】次「ヲ、よいなりの
62	とても縛らるるならばこう尋常に後手には縛られいはいせいでな	◎	◎	●	◎	◎	○	◎	【又】とても縛らるるならば、こう尋常に、うしろ手には縛られいで
63	主「とつたぞ	●	●	●	●	●	●	●	【明】主「とつたぞ
64	次「是は何となされまます	◎	●	●	◎	●		◎	【又】次郎冠者 これはなんととなされまます
65	主「兎角兩人して飲むに依て此の通じや	○	○	○		○	◎	○	【馬A】イヤ〜兩人して呑と聞たニよつて其通じや
66	今日も亦山一つあなたへ行く	○	○	◎	◎	○	○	○	【又】今日も山一つあなたへ行く
67	よう留守をせい	●	●	●	●	●	●	●	【明】能ふ留守をせい
68	太「どれいぞおいでなさるるならば此のなわをといておいでなされませ	○	●	●		○		●	【宗】どれへぞ御出被成る、ならば此繩を解てお出被成ませ
69	次「といておいでなされませ	○		●		△		●	【又】次郎冠者 解いてお出でなされませ
70	主「やがて戻らうぞ	●	△	△	●	△	△	●	【明】主「頓而戻ふぞ
71	兩人「解いておいでなされませ			◎		△	◎		【又】太郎冠者 や、申し、繩を解いてお出でなされませ
72	太「ほ一とつと行かせられた	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	【明】太「とつと行れた
73	次「誠にとつと行かせられた	△	△	●	△	△	△	◎	【又】次郎冠者 まことに、とつと行かせられた
74	太「さあ先づ下に居よう 次「心得た	◎	◎	◎	◎			◎	【明】太「先下に居よ 二郎「心得た
75	太「たが申し上げた事じやなあ	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	【明】太郎「是ハ先たか申上た事しやなア
76	次「たが申し上げた事じやしらぬ	◎	◎	◎	◎		△	◎	【明】二郎「されは誰か申上た事しやそ
77	太「こうつくりとしてあれば又酒が入飲みたいなあ	◎	◎	◎	◎	△	○	◎	【明】太郎「此様にして居れハ一入酒か呑たい事じや
78	次「云ふ迄もないことじや	○	○	○	○	△		○	【明】二郎「其通りじや
79	太「それがしが藏の戸を明けて見よう		○						【宗】先藏の戸をあけふ
80	次「その体であくかの	○	△	○	○	○	○	○	【明】二郎「一段とよかろふか藏の戸か明まい
81	太「それがしが分別と致した	○		◎	○	○	◎	◎	【又】太郎冠者 それはみどもが分別をした
82	次「太郎下者が分別と心もとない	△			△	△	◎		【馬A】「きやつが分別た心元なひ
83	太「がちやんがら〜、そうりや藏の戸が明いた	○	○	○	○	○	○		【明】太郎「是〜こふして明ふと云事じや。くわら〜
84	次「誠に藏の戸が明いた	○	○	△	△	○	△	△	【明】二郎「ハア明たは〜
85	太「こうりや夥しい壺じや	○	○	○	○	△	○	○	【馬B】扱おひた(ママ)しい壺数せあナア
86	どれに致そうぞ	○	○	◎	○	○	○	◎	【又】太郎冠者 さてこれは、どれにせう
87	次「そりや汝が適宜にせい	△	○	○	○	○	○	○	【古】次「夫はそちか物好にせい
88	太「此のしぶかみのおほひのしてあるのが良からう。之に致そう	○	○	○	○	○		○	【明】太郎「あのしぶかみて覆のしたを明ふ

No.	馬瀬現行本	明和中根本	宗家系本	又三郎信英本	茶表紙本	古典文庫本	馬瀬A本	馬瀬B本	近似する詞章例
89	めり〜、ふーん良い匂がするは	○	◎	◎	◎	○		◎	【宗】めり〜うんよるにほいじや
90	次「是迄にほふは	◎	◎	◎	●	◎		◎	【茶】是迄にほふは
91	太「どれ〜汲むものをとつてこう	△	△	△	△	△	△	△	
92	次「ともかくもせい	○	○	●	●	○	●	●	【又】次郎冠者ともかくもせい
93	次「おうやい〜								
94	何とする	●	◎	◎	●	◎	●	●	【明】二郎「何とする〜
95	太「のまれぬはいや	●	●	◎	●	◎	●	●	【明】太郎「飲れぬはいや
96	次「それは先づそれがしに飲ませ	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	【馬A】「それハマづ某二の(ママ)ませ
97	太「そちに飲ませる、心易いがそれがしは何としてのむことじや	○	○	○	○	○	◎	○	【馬A】「汝このまする分、心安ひ事じやか、某ハなんとしてのむ
98	次「それはそれがしが分別と致した	○	○	○	○	○	◎	◎	【馬A】「夫ハ某か分別した
99	先づのませしてくれ	◎	○	○	○	○	◎	◎	【明】先飲セ
100	太「そうあらば飲ませてやらう	○	○	○	○	○	△	◎	【馬B】そふあらは呑せふ
101	のむか〜		○	●	○	○	◎	●	【又】太郎冠者 飲むか飲むか
102	次「飲むぞ〜			●	●			●	【又】次郎冠者 飲むぞ飲むぞ
103	さても〜旨い事じや	△	△	△	△	△	△	△	
104	太「又汲んでこう	△		◎	◎		○	○	【又】太郎冠者 また行て汲んでこう
105	次「ともかくもせい		△	△	●	△	△	△	【茶】ともかくもせい
106	太「之は先づ何として飲むことじや	△	○	○	○	○	○	△	【宗】扱何としてのます
107	次「分別といつば別の事ではない			●	●	●	●	●	【古】次「分別といつば別の事ではない
108	之を此の手に持たせておいてのめと云ふ事じや	○	◎	◎	◎	●	◎	◎	【古】是、この手に持せて置てのめといふ事ぢや
109	太「之は一段の分別じや	◎	●	●	●	○	◎	○	【宗】是ハ一段の分別じや
110	次「飲むか〜	●	◎	◎	◎	◎	●	●	【明】呑か〜
111	太「飲むぞ〜	△		●	●	△	△	●	【茶】呑ぞ〜
112	さても〜良い酒じやなあ	○		◎	○		○	○	【又】太郎冠者 さてさて、よい酒ぢやなあ
113	次「その通りじや	●		●	△			△	【明】二郎「其通りしや
114	太「又汲んでこう			◎	○			○	【又】太郎冠者 また行て汲んでこう
115	一つ歌はう	○	○	○	○	○	○	○	【明】ちと諷ふ
116	次「一段と良からう		○	●	●	●			【又】次郎冠者 いちだんとよからう
117	次「こう受持つた所で、汝何なりとも一さし舞ぬか		○	◎	○	○	◎	◎	【馬B】扱こふ受持た。汝一さし舞へ
118	太「此の体で舞は許してくれい	△	△			△	△	◎	【馬B】此躰ではゆるしてくれ
119	次「その体が面白い		○			△	◎	◎	【馬A】イヤ〜其ていかをもしろい
120	ひらに一さし舞えい	○	○			○	◎	◎	【馬B】ひらに舞へ
121	太「そうあらば舞うても見よう程に、汝字を歌うてくれいよ	◎	○	○	○	◎	○	○	【明】二郎「夫ならば先舞ふて見よふ。地を諷ふてくれい
122	次「心得た		○	○	○	●	○	○	【古】シテ「心得た
123	舞 暁の明星	○	○	○	○	○	○	○	【古】次「舞
124	次「良いや〜	●	●	◎	●	●	●	●	【明】二郎「よいや〜
125	太「ぶちようほう致した		○	◎	◎	○	△	◎	【又】次郎冠者 不調法をした
126	次「さあ〜、のませしてくれい	○	○	◎	◎	◎	●		【馬A】さあ〜のませしてくれい
127	太「心得た			△	●	△			【茶】心得た
128	のむか〜			◎	●	◎	◎		【茶】呑か〜
129	次「のむぞ〜				●				【茶】呑ぞ〜
130	太「又汲んでこう			△			△		
131	又一つ歌はう		○	○		○			【古】小謡
132	次「とも角もせい								
133	太「こう受持つた所で			○	○	◎	○	○	【古】次「さあ〜かう承持た所て
134	汝も何なり共一さし舞へ	○	◎	◎	◎	○	◎	◎	【宗】サア〜汝も一さしまへ
135	次「此の体で舞は許してくれい	○	○	○	◎	○	○	◎	【茶】某ハ此ていてハゆるしてくれ
136	太「その体が面白い	●	△	◎	◎	△	●	◎	【明】二郎「其躰か面白い
137	ひらに一さし舞へ	○		○	◎	○	◎	◎	【茶】ひらにまへ
138	次「そうあらば舞うても見よう程に、汝字を歌うてくれいよ	◎	○	○	○	△	○	○	【明】太郎「夫ならば舞て見うか、地を諷ふてくれい
139	太「心得た	●		●		●	●		【又】次郎冠者 心得た

No.	馬瀬現行本	明和 中根本	宗家 系本	又三郎 信英本	茶表 紙本	古典 文庫本	馬瀬 A本	馬瀬 B本	近似する詞章例
140	舞 七つ子	○	○	○	○	○	○	○	【古】 シテ「舞
141	太「とがをばいちやが追ひましよとはでかしたなあ	△		○		○			
142	次「ぶちようほう致した	△		◎		△	◎	◎	【又】 太郎冠者 不調法をした
143	太「さあ〜のましてくれい		△	△		△	●	△	【馬A】 「さあ〜のましてくれい
144	次「心得た								
145	のむか〜						○		【馬A】 「とれ〜、のむか〜
146	太「のむぞ〜								
147	さても〜旨い事じやな								
148	太「何と思ふぞ			◎	●	◎			【茶】 何と思ふぞ
149	此のなわを解いて飲うだればさぞ旨からうな	○	◎	○	○	○	○	○	【宗】 扱此繩をといて飲だならバさぞ面白かるふナア
150	次「それは云ふ迄もない事じや	△	△	◎	◎	△	△	◎	【又】 次郎冠者 それはなんちが言ふまでもないことぢや
151	太「何と汝がなわはとけぬか	○	◎	○	○	○	●	●	【馬B】 なんと汝か繩は解ぬか
152	次「いやもう堅う縛られたに依て解くる事ではない		○	○	○	○	◎	○	【馬A】 「いやもかとふしはりて置かれてとくる事てハない
153	太「何とぞして解いて見よう		△	◎	○		△		【又】 太郎冠者 どうぞして解いてみよ
154	次「ちと緩うだようなぞよ	○	◎	◎	●	◎	○	○	【茶】 ちとゆるうたよふな
155	太「はやう解け〜	○		●	●	○		●	【又】 太郎冠者 早う解け早う解け
156	次「さあ解けたは	○	○	○	△	○	○	○	【明】 二郎「イヤとけたは
157	太「それがしのも解いてくれ	○	○	○	○	○	○	○	【明】 早ふといてくれい
158	次「汝はもそつとそうしてゐよう								
159	太「之が何となるものじや、そう云はずと解いてくれい								
160	次「そうあらば解いてやらう	△	△	△	△			○	【馬B】 お、とれ〜汝も解て遣ふ
161	太「兎も角もしてくれい								
162	次「さぞ窮屈であつたであらうな		◎	○	○		○	○	【宗】 ア、さぞきうくつにあつたであるふ
163	太「いやもう手がむり〜とする事じや	△	△	◎	◎	△	◎	◎	【又】 太郎冠者 手がむりむりすることぢや
164	次「さあ解けたは					△	△	△	
165	太「之からは吸(ママ) 飲みに致そう	△	△	△	△	△			
166	さあ〜歌へ〜								
167	「ざざんざー濱松の音はざざんざー		○	●		●			【又】 次郎冠者 ざざんざ、浜松の音は、ざざんざ
168	太「さても〜旨い事じやなあ	△	△					△	
169	次「その通りじや	△							
170	太「頼うだお方はそれがし共を堅う縛ておかれたと思うてゆる〜としてゐらるる事じや	○	○	◎	◎	○			【又】 頼うだお方は、それがしどもを縛ておいたと思うて、ゆるりとしてゐらるることぢやなあ
171	主「よう〜只今帰つてござる		△	○					【又】 主 用事をととのへ、やうやくただいま帰った
172	兩人の者が待ちかねてゐるであらう	△	◎	◎	△	△		△	【宗】 定而兩人のものが待かねているでござろふ
173	之は如何なこと	●	●	●	●	●		●	【明】 是ハいかな事
174	又酒を盗んで飲んでゐる	○	○	○	○	○		○	【宗】 又繩を解て酒をのふでゐる
175	太「次郎下者ちよつと来い	●	○	●	●	○	○	●	【明】 太郎「次郎官者一寸と来い
176	見するものがある	○	○	○	○	○	○	○	【明】 物を見せう
177	次「何じやぞいやい	◎	○	△	◎	○	○	○	【明】 二郎「何しや
178	太「此の酒杯の中に頼うだお方のかけが見ゆる	○	○	○	○	○	○	◎	【又】 太郎冠者 この盃の内へ、頼うだ人の顔が映る
179	次「誠にかけが見ゆる	○	○	○	○	◎	●	◎	【馬A】 「誠ニかけなみゆる
180	太「ほ〜どれいやらいた	○	○	●	○	◎		●	【又】 太郎冠者 ほ、どれへやら行た
181	次「誠にどれいやらいた		◎	●	●	◎		●	【又】 次郎冠者 まことにどれへやら行た
182	太「それがしの思ふは、頼うだお方はしゆう心の深い人じやに依つて、酒を盗うでのむか〜と思ふしゆう心が此の酒杯の中へ浮ぶと見ゆる	○	○	○	○	○	○	○	【明】 太郎「某の思ふは頼ふた人は常々こん性の叶ハぬ人しやに依て、縛てハ置たれとも酒を呑か〜と思ふ執心か此内へ通ふと見へた
183	次「その通りじや	○	○		●	○	●	○	【茶】 其通りしや

No.	馬瀬現行本	明和中根本	宗家系本	又三郎信英本	茶表紙本	古典文庫本	馬瀬A本	馬瀬B本	近似する詞章例
184	太「此の体を歌ひに歌はうではあるまいか	○	○	○	◎	○	○	◎	【茶】 いさ此ていを謡に諷ふてハ有まいか
185	次「一段と良からう	●	●	●	●	●	●	●	【明】 一段とよからふ
186	さあ〜歌へ〜	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	【馬B】 さア〜うたへ〜
187	太「月は一つ	●	○	●	●	○	●	●	【明】 太郎「月ハーツ
188	次「かけは二つ	●	○	●	●	○	●	●	【明】 二郎「影ハ二ツ
189	兩人「満潮の夜の酒杯に主をのせて	●	●	●	●	●	●	●	【明】 兩人「三ツしほの夜ルの盃に主をのせて
190	主とも思はぬ	○	○	○	○	○	●	○	【馬A】 ぬしとも思ふはぬ
191	うちのものかな	△	△	△	△	△	△	△	
192	主「やい〜 やいそこなもの	◎	○	◎	◎	○		○	【明】 ヤイ〜ヤイそな (ママ) やつ
193	次「お早やう お帰りなされました	○	○	○	○	△	○	○	【明】 太「そりや御帰り被成たは
194	主「何のお早やう			△		△			
195	次「ご許されませ〜			●		◎			【又】 次郎冠者 ご許されませ、ご許されませ
196	主「やい〜 やいそこなもの	○	●	○	○			△	【宗】 主 やいそこなもの
197	太「お早やうお帰りなされました	○	○	△	○	○		○	【明】 太郎「ハア御帰被成ましたか
198	主「何のお早やう			△	△	△		○	【馬B】 何の御帰り被成ました
199	太「御許されませ〜	●	○	◎	○	△			【明】 太郎「御ゆるされませ
200	主「まだそこにおるか			●	●			●	【又】 主 まだそこにおるか
201	太「ご許されませ〜	●	●	●	◎	●		◎	【明】 御ゆるされませ〜
202	主「己を何としてくれよう知らぬ		◎		◎	○			
203	太「先づお待ちなされませ								
204	主「待てとは何と								
205	太「うちのものかな								
206	主「まだそのつれをいひやる								
207	太「ご許されませ〜								
208	次「ちやつと来い〜			◎	◎	△			【又】 次郎冠者 ちやつとこい、ちやつとこい
209	主「やるまいぞ〜	●	●	●	●	●		●	【明】 やるまいぞ〜
210	兩人「ご許されませ〜		○		●	◎		◎	【茶】 御ゆるされませ〜

表 2-2 馬瀬現行本と和泉流諸本の詞章比較・集計

馬瀬現行本 (全 210 件)		●	◎	○	△	●◎○ 合計
明和中根本	件数	25	30	64	28	119
	割合 (%)	11.9	14.3	30.5	13.3	56.7
和泉流宗家系本	件数	23	35	69	24	127
	割合 (%)	11.0	16.7	32.9	11.4	60.5
又三郎信英本	件数	44	60	45	20	149
	割合 (%)	20.9	28.6	21.4	9.5	71.0
茶表紙本	件数	41	35	58	21	134
	割合 (%)	19.5	16.7	27.6	10.0	63.8
古典文庫本	件数	24	30	71	36	125
	割合 (%)	11.4	14.3	33.8	17.1	59.5
馬瀬 A 本	件数	33	35	39	22	106
	割合 (%)	15.7	16.7	18.6	10.5	50.5
馬瀬 B 本	件数	33	46	53	19	132
	割合 (%)	15.7	21.9	25.2	9.0	62.9

(割合の数値は、小数点第 2 位を四捨五入した。)

宗家系本や古典文庫本とも六割前後で関係性は認められよう。ただ●印の割合がいずれも一割程度で、こちらも馬瀬B本に比べ低い。これらの結果から、馬瀬現行本は和泉流諸本の中でも、又三郎信英本との共通性が他に比して高いと言える。この点は馬瀬B本に認められた傾向を受け継ぐものと言えるが、詞章の一致度は、馬瀬B本に比べると低い。その中で、馬瀬B本と又三郎信英本の詞章の特徴として、同じ内容を反復する傾向を指摘したが、馬瀬現行本の独自箇所でもそのことが認められる。馬瀬現行本では、酒を飲んだ後の小舞の順序が、諸本では次郎冠者、太郎冠者の順となるが、太郎冠者、次郎冠者の順となる。二度目の小舞が披露された後、再度酒をくみ交わす場面（表2-1のNo.142-144）が描かれる。

馬瀬 次「ぶちようほういたした 太「さあくのましてくれい 次「心得たのむか〜 太「のむぞ〜 さても〜 旨い事じやな

又 太郎冠者不調法をした。次郎冠者その、手も力もないはでかいたわいやい。 太郎冠者そのとほりぢや。

又三郎信英本では、酒を酌み交わす場面はなく、他の諸本でも「中〜おもしろふ有た」（和泉流宗家系本）と、縄を解く場面が続くが、馬瀬現行本では、このように小舞の後、酒を飲む場面を再度繰り返す。こうした独自場面の付加は、馬瀬B本に認められた傾向に通じるものであろう。

今回の調査の結果、馬瀬狂言の「棒縛」の現存台本においては、和泉流の他、馬瀬C本のような大蔵流の詞章といった複数の詞章が伝承されていたことが確認された。その中で現代に至るまで伝えられた本曲の詞章は、又三郎信英本との関係性から、野村又三郎派系統の詞章であったと言えよ

う。そして、その詞章をそのままの伝承するのではなく、和泉流とは異なる独自の詞章を加えていたことが指摘できる。

馬瀬現行本において、和泉流諸本と大きく異なるのが、終曲の場面である。まずそこで謡われるのが次の謡である。（表2-1のNo.187-191）

太「月は一つ 次「かげは二つ 兩人「満潮の夜の酒杯に主をのせて

主とも思はぬうちのものかな

この謡は大蔵流の詞章（引用は大蔵虎寛本に依る）

（シテ、謡）月はひとつ。（太郎冠者、謡）影は。（シテ、謡）ふたつ。（シテ・太郎冠者、謡）みつ潮の夜のさかづきに、主を乗せてしう共おもはぬ内の者かな

と一致する。和泉流では三宅派の狂言三百番集本にも「主とも思はぬ内の者かな」という表現が認められるが、謡の冒頭は宗家系と同じ「主は一人影は二人」とあるので、大蔵流の詞章とは一致しない。この箇所を馬瀬現行本はなぜ大蔵流の詞章で演じていたのだろうか。この箇所は能「松風」の謡を一部替えた謡である。「憂しとも思わぬ」とあるところをあえて「主とも思わぬ」とすることで、主人を主人と思っていない「内の者」、つまり自分たちの現在の状況と重ね、より主人に対して反抗する両冠者の姿勢を明確にする。この後、両冠者が主人に酒を飲んでいたところを叱責される展開となるので、より効果的と言えよう。更にこの後、両冠者が幕に入るまでにもう一度主人とやりとりをするという馬瀬独自の場面がある。それが次の箇所である。（表2-1のNo.203-207）

太「先づお待ちなされませ 主「待てとは何と 太「うちのものかな 主「まだそのつれをいひやる 太「ご許されませ〜」

この「追い込みを一旦止める」という形が馬瀬狂言資料において多く認められ、特に馬瀬現行本においてその傾向が強いことを拙稿で報告した。この追い込みの形を一旦止める演出では、そこで両冠者が主人をからかう形になることから、大藏流の詞章「しう共おもはぬ内の者」の方が和泉流の詞章よりこの場面に合致したものとなる。更にこのやりとりの前に、主人が帰った際の両冠者の出迎えは(表2-1のNo.193・194・197・198)

馬現 次「お早やうお帰りなされました 主「何のお早う (中略)

太「お早やうお帰りなされました 主「何のお早う

明 二「御帰り被成ましたか 主「扱々にくいやつ

と「お早やうお帰り」と皮肉まじりのことばで、そのことを主人も理解して答えている。こうしたやりとりに続いて追い込みを止める独自の場面となるので、両冠者の、主人に対する態度が鮮明に描き出される。

前稿で示した通り、馬瀬C本が大藏虎寛本の詞章を伝えるものであったことから、馬瀬では大藏流の詞章で演じられる時期が一時期であったことが想定される(馬瀬の狂言はもともとは大藏流であったと伝えられる)。こうした台本が伝えられていたこともあり、この演出に適った謡の詞章として上演していたのではないだろうか。この「内の者かな」の表現は先述の通り、狂言三百番集本でも採用されていた。馬瀬現行本の「佐渡狐」等には、狂言三百番集本の影響が認められたことから、本曲でも同様の可能性がある

ことも考えられるが、この点については、今後の調査で改めて確認したい。このように馬瀬現行本の詞章は、両冠者が縄を解く和泉流諸本の中でも、馬瀬B本の流れを引き継ぎ、又三郎信英本に認められる野村又三郎派系統の詞章に、馬瀬狂言独自の詞章・演出を加えたものと言えよう。

おわりに

本稿では、馬瀬狂言に伝わる「棒縛」の馬瀬B本と馬瀬現行本について述べた。馬瀬A本、馬瀬B本、馬瀬C本と、それぞれ特徴を持つもので、複数の系統の詞章が馬瀬狂言に伝えられていたことが明らかとなった。その中で、これまで紹介した馬瀬狂言の台本の多くが江戸後期の和泉流山脇派の詞章に近いものであったが、本曲では、馬瀬B本と馬瀬現行本が野村又三郎派の詞章と最も近い関係にあることが認められた。馬瀬狂言の「棒縛」は、野村又三郎派の詞章を中心に伝承されてきたと言えよう。馬瀬村の人々が野村小三郎玉泉の指導を受けたことは、玉泉が創作した曲「長久楽」「豊年貢」や「玉泉流」と称する台本の存在等から明らかであったが、詞章においてもその関係性が認められたことになる。天保十三年の年記のある馬瀬B本が、天保頃に馬瀬で活動していた玉泉の影響を受けていることは十分に考えられよう。野村又三郎派の詞章が、馬瀬狂言全体にどの程度認められるか、今後も調査を継続し、その関係性を明らかにしたい。

また今回の調査対象とした和泉流台本の中で、明和中根本と狂言口授箋の詞章、また宝暦十年本と和泉流密書の詞章は、それぞれ共通する箇所が多く、同系統の台本と推測される。この点についても、「棒縛」の曲に限ったものか、台本全体に認められる傾向なのかを引き続き調査し、諸本研究として位置づけたい。

馬瀬狂言の「棒縛」は、現在も上演が続けられている人気曲である。天保頃に馬瀬村を訪れ指導した野村小三郎玉泉の芸をもとに、馬瀬独自の工夫が加えられ演じられてきた。それが現在の馬瀬狂言「棒縛」なのである。

注

1 拙稿『学苑』969 二〇二二・三を参照。

2 本研究で使用した台本は、前稿と同様のものであるが、再掲する。なおこれらの台本は橋本朝生著『続狂言の形成と展開』（瑞木書房、二〇二二）を参考に調査した。資料として使用した台本と台本に関する参考文献は以下の通りである。

なお、原文を引用する場合は、適宜句読点を付した。また原文に付されている振り仮名、傍注等は省略した。なお、各諸本を提示する際には略称を用いた。

天理本 『狂言六義』（天理図書館善本叢書24、天理大学出版部、一九七五）、
『天理本狂言六義 下』（北川忠彦他校注、三弥井書店、一九九五）、
『狂言六義全注』（北原保雄・小林賢次著、勉誠社、一九九二）

和泉家古本 『日本庶民文化史料集成 4 狂言』（芸能史研究会編、三一書房、一九七五）

宝暦十年筆和泉流本 京都大学文学研究科図書館蔵『和泉流傳狂言六義』
明和中根本 法政大学能楽研究所蔵

波形本 法政大学能楽研究所蔵の紙焼写真にて確認

和泉流宗家系狂言本 法政大学能楽研究所蔵『横本和泉流狂言本』

茶表紙本 法政大学能楽研究所蔵『狂言本茶表紙六儀』

『和泉流秘書』 『和泉流狂言選』 愛知県立大学附属図書館蔵（島津忠夫、野崎典子編、和泉書院、一九八〇）。『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）
『和泉流秘書』 愛知県立大学附属図書館蔵（野崎典子・小谷成子 『愛知県立大学
書館蔵』 翻刻・解題一〜一二）

大学院国際文化研究科論集』二（二〇〇一・三）〜『愛知県立大学日本
文化学部論集国語国文学科編』（二〇二二・三）

狂言口授箋 国立国会図書館蔵『狂言口授箋』

狂言大全集 国立国会図書館蔵『祖家秘書狂言大全集』

和泉流密書 国立国会図書館蔵『和泉流密書』

古典文庫本 『和泉流狂言集』（古典文庫、一九五三〜一九六二）

野村又三郎信英本 古川久・小林貞校注『謡曲・狂言集 校注古典叢書』（明
治書院、一九七八）

狂言三百番集 『狂言三百番集 上』（野々村戒三、安藤常次郎共編、能楽書林
一九四二）

大蔵虎寛本 岩波文庫『能狂言 上』（笹野堅校訂、岩波書店、一九四二）

3 各章段の分け方は前稿と同様に西村聡氏の「（棒縛）の演出とその変遷―金沢と名古屋の比較を視点に―」（『和泉流狂言の伝承―金沢と名古屋―』（金沢大学人間社会研究域、二〇二二）所収）を参考にした。

4 「馬瀬狂言資料の紹介（7）―馬瀬における「船渡聲」の変遷―」（『学苑』
二〇二三・一）

5 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介（10）―「扇磔」について―」（『学苑』929 二〇一
八・三）、「馬瀬狂言資料の紹介（11）―「今神明」について―」（『学苑』939 二
〇一九・一）、「馬瀬狂言資料の紹介（12）―「木実論」について―」（『学苑』951
二〇二〇・一）で、馬瀬文化二年本が明和中根本、茶表紙本、和泉流宗家系本、
狂言口授箋と関係があることを指摘した。

6 小林賢次氏「和泉流雲形本『狂言六義』の本文の性格について―筆録時期と言
語事象―」（『人文学報』351 二〇〇四・三、後に『狂言台本とその言語事象の
研究』（ひつじ書房、二〇〇八）に所収）、小林千草氏「成城（甲）本における
「ぜあ」その実態と狂言台本としての性格」（『東海大学紀要文学部』104 二〇
一六・三、後に『幕末期狂言台本の総合的研究 和泉流台本編上』（清文堂、二

○一九)に所収。引用は単行本(p26)に拠る。

7 馬瀬現行本は、馬瀬狂言保存会で現在使用されているものを用いた。

8 馬瀬現行本の詞章には、芸の伝承が口伝であったため、誤って伝えられた箇所が確認できる。No.15の「太郎冠者はあなたの留守にさえなれば来た者と酒を盗うで下さるる」の「来た者と酒を盗うで」の箇所は、諸本「ひたものに酒を盗うで」(明和中根本)である。こうした伝承の中での揺れが詞章の一致度の低さにも通じるものと考えられる。

9 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(9)―追いつみの演出―」『学苑』905 二〇一六・三)参照。

10 野村小三郎玉泉が馬瀬に訪れるまで、馬瀬では大藏流の狂言が演じられてきたことが『能楽大辞典』(筑摩書房、二〇一一)をはじめとする先行研究に指摘されるが、具体的な典拠は特に示されていない。

11 『玉泉流秘書』(中北小すゑ4)や『流儀狂言秘書 玉泉翁直伝』(中林武一30ノ8)がある。『流儀狂言秘書 玉泉翁直伝』には、「天保七年ひのえ申九月廿九日六年ぶりに／稽古所に帰参依テ改メ記置者也。尾州 野村玉泉 七拾五翁」の記事がある。

【翻刻】

〈凡例〉

一、この本文は、『鬼瓦の外八番』(中北小すゑ23)を翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、原則として現在通行の字体を用い、適宜句読点を付した(当て字・反復記号「、」「、」「、」「、」「、」は底本のままとした)。

一、仮名遣いについては、底本の通りとした。清濁、振り仮名も底本のままである。

一、底本における誤脱と判断される不審箇所には「ママ」を付した。

名乗て のさ者ともか某か留主になれば酒を盗ふてたふると承た。今日も去方へ参る。夫ゆえ酒をエ盗ぬ様に分別といたいた。次郎官者有か。(如常出し二郎出ル) 汝呼出す別のことでない。聞は某の留主になれば太郎官者か酒を盗て呑と聞たか定か。扱はお耳に入りましたか。シカ。真かう有ふと存、常々色々異見いたせとも承引致さぬに依てて御座る。成ほど御留主になればひたもの酒を盗ふて下されます。扱々憎ひ事セあ。夫二付今日ハ去方へ行。何卒酒を呑ぬ様に分別はあるまいか。されは何とかよふ御座りませふそ。汝思案せい。ハア、よい致様か御座る。きやつは此頃棒を稽古致します。是へ召出して棒を遣してよい間を見て棒縛りに致しませふ。是ハよい分別セあ。そふあらは是へ呼へ。」23才畏て御座る。太郎官者召そ。何セア召といふか。(坐左リヒラキ躊躇ナカラ相手ニナル) 中々早ふ出さしませ。心得た。御前に。(如常立) 汝呼出す別の事でない。そちは棒を稽古すると聞。一ト手遣ふて見せひ。是ハおもひも寄らぬ事を仰られます。私ハ終に棒を遣ひました事ハ御座りませぬ。イヤ、うそをいわぬ人に聞た。セひとも遣へ。扱ハ次郎官者申上たな。某ハ申上ねともあなたによふ御存せあ。早ふ遣ふて御目に掛さしませ。左様ならば心得ました。先夫に御待なりませ。早ふ遣て見せ。畏て御座る。(ト云テ太鼓坐エ棒トリニ行間に次郎官者ぬかるナ、心得ました) 惣して棒は四十八手とハ申セとも、くたけは八十八手にも遣ひます。先向ふから打て参るをトさへましてすそな難イ、胸をほうどつく手か御座る。早い手セあナア。二郎シカ。又打て参たをトと受まして、引ばづいてめうたん二つに打割手も御座る。是も早い手セあ。又表裏に掛て」23ウ参る時ハ是をかういたしてヤヤ。取たそ。是は何とさせらる。何とはちつとしておれ。取たそ。是は何とする。何とはおのれちつとしておれ。にくいやつ。ホウよいなりセあ。とても縛らる、ならはコウ後口手に尋常には縛られて。取たそ。是は何と被成ます。持てまゐつたの。何とはおのれちつとしておろ。先是は何とした事て御座る。イヤ某か

留主になれば酒を盗み呑と聞たによつて其通りセア。夫は二郎冠者で御座る。太郎官者で御座る。御主セア。セチセア。汝セア。わこりよセア。ヤイ〜。ハア。兎角兩人して呑聞た。今日も用事有て去方へまゐる。能留主をせい。とれへそ御出被成る、ならば、此繩を解て御出被成ませ。解て御出被成ませ。頓て戻ふそ。」24オア、申、繩を解て御出被成ませ。二郎シカ〜。申申申、ホ早とつと行せられた。誠にとつと行れた。先下に居よ。心得た。扱是は誰申上た事セア。されは誰か申上た事セアしらぬまで。ハウこふしていれば一入酒か呑たい事セアナア。其通りセア。呑事はならずとも酒の匂ひを聞てなりとも慰ふてはあるまいか。夫は一段とよかろふか、蔵の戸かあくまいそよ。それは某か分別しておゐた。(土蔵の戸明るイウ) こふてして開ふといふ事セア。是はよい分別セア。扱おひたしい壺数セアナア。シカ〜。扱とれにセふそ。それこそそちの物好にせい。そふあらはアノ渋紙で覆のしてあるにせふとおもふか何と有ふ。是は一段とよかろふ。そふあらは」24ウ先覆を取ふ。メリ〜。ムウよい匂ひセア。爰迄も匂ふは。扱匂ひを聞ぬうちは其様にもなかつたか、匂ひを聞てからは虫か込上て堪忍ならぬ。其通りセア。何とそ呑たい物セアか、イヤ分別とした。(ト云ヒテ盃大鼓坐へ取二行) 二郎きやつか分別た心元ない。是〜こふしてくもふといふ事セア。是はよい分別セア。是は先身ともか呑ふ。二郎兎も角もせい。二郎何とする〜。太郎呑れぬはいヤイ。それは先身ともに呑せ。ムウ御主には呑せうか、某か呑よふかない。それは某か分別とある。先呑せ。そふあらは呑せふ。呑か〜。呑〜。(三辺計何辺といふ) ムウよい酒セア。何とよい酒か。最一ツ汲てこふ。早ふ汲てこい。さア呑せて呉。分別と云ハ別の事でもない。是此手に持せて呑といふ事」25オセア。是は一段と出来た。そふあらは呑そよ。早ふ呑、呑か〜。呑〜。(如前三辺計) ムウよい酒セア。何と能酒セアナア。イヤ最一ツ汲ふ。面白なつた。ちとうたおふ。(諷にて汲。笑) 扱

こふ受持た。汝一さし舞へ。此躰てはゆるしてくれ。イヤ其なりか面白イ。ひらに舞へ。そふあらは舞ても見よふか。一段とよかろ。(舞 七つ子) よいや〜。(笑) 不調法をした。中々面白イ事て有た。(又諷にて酒を汲。二郎冠者か前へ置) 扱身ともかふ受持た。汝も一さし舞へ。此躰てはゆるしてくれ。其なりか面白イ。ひらに舞へ。そふあらは舞てもみよふか。(舞 暁の明星) よいや〜。(笑) 不調法をした。中々面白イ事て有た。太郎扱某かおもふは此繩を解、呑たらは一段と面白かるふなア。」25ウ二郎それは汝かいふ迄もない事セア。なんと汝か繩は解ぬか。堅ふく、つておかれたか、去ながら最前からちよゆるふたよふな。早ふとけ〜。ア、解ればよいか。早ふ解け〜。二ハア。太何とした。解たハイヤイ、何しや解た。中々。さア身とも解てくれ。お、とれ〜汝も解て遣ふ。早ふ解てくれ。扱さそく、られハ窮屈に有たてあらふ。イヤモ手かむり〜いふ事セア。(サソソウ有フナダアリ) 二郎扱身とも珍し酌をセふ。一段とよかろふ。(二郎呑セさす) 先是は汝へさそふ。(諷にて汲) 太郎是へくれ。(笑 呑トシテ二郎ヲ呼) 主兩人の者に留主を申付た。先急て歸ふ。是はいかな事、諷の声かする。サレハコソ兩人ながら繩を解て酒を呑いる。扱々憎ひ事かな。先様子を聞ふ。太二郎官者ちつとこい。物を見せよ」26オ 何セア。ちよつと来い。物を見せふ。何セアそいヤイ。(ト太郎か傍へ来ル) コウ盃の中に頼た人の姿たか見ゆる。誠に姿か見ゆる。ホウ、とれへやら行た。誠にとれへやらいた。某かおもふハ(ト盃ヲ下ニ置) 頼た人は日頃根性の叶はぬ人セアによつて、縛てはおかれたれとも呑か〜とおもふ執心か此盃のうちへ通ふと見へた。成程通ふと見へた。いさ此躰を諷にうたおふてはあるまいか。一段とよかろ。さア〜うたへ〜。太郎、月はひとつ。二郎かけはふたつ。二人三つ塩のよるの盃に主を乗てうしともおもわぬしほ、かなや。(笑) 扱々憎い奴セア。某を諷に作りおつた。ヤイ〜。(ト諷ノシマイノ笑所也) ソリヤ御歸り被成た。誠に歸りなされた。ハアこりや御歸被成

ましたか。何の御帰り被成ました。シカ／＼。またそこ」26ウにおるか。(太郎此間に脇柱ノ傍中腰にテ酒を呑) ヤイ／＼／＼。ハア御帰り被成ましたか。何シの御帰り被成ました。扱ミ腹の立。ハア御ゆるされませ。またそこにおるか。ハアゆるさせられ。アノ横着者。ハアゆるされられ。ヤルまいそ／＼。(追回シ追込)

棒 紐 葛桶蓋」27才

【26才上部欄外の書き込み】

も解てくれ／是は汝へさそふ／くれ。身ともか／とせふ (諷ノ酌) 太 汝へさ／(太郎酌) 二郎 最前／最卒度短／つた 又何成とも／舞 陸ニアガレバ／／ 不調法を／中ミ面白イ／□あつた 扱是は／□そふ (二郎酌 トシテ／ミルモアリ)

〈付記〉

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧のご許可、並びにご高配を賜りました馬瀬狂言保存会会長河原良治氏をはじめ、会員の方々に改めて深謝申し上げます。また資料調査にご高配を賜りました法政大学能楽研究所に深謝申し上げます。

(やまもと あきこ) 日本語日本文学科)